



特233
A01

小野田郷土資料 第四編

東須惠村風土記

始



特233
801



小野田郷土資料館
東領惠村
記

小野田町立小野田圖書館



本編は天保年間の風土注進案の東復裏村としました、この注進案は天保十三年頃の作製と思はれます、しかも既往に於ける最も地方事情を詳記した、御上史料としての重要なものであります。

本編の原本は當時庄屋より代官所へ提出したものであります、種々寫本がありますか、此も多分の寫し損じがあります、勿論原本と雖書損、當字はありますか、凡水は改し方がありませぬ、殊に所謂本家流の書体であるので判讀したるものもあります。

東須惠村

當村但言に上右者洲江と唱へしが往昔神切皇石三韓御征伐の時此
漸邊に聚船し給ひし歟と云ふ故ありて復惠と云ふたためたる由申傳矣
香敷は西復惠なる卷に記ぬ近世東西にわか水乙今此邊を東須惠と
いへり

一 堅横里教

東須惠村之内に有之上中野村且村の儀は脇村へ附屬といへども
一村の内にて他村へ譲り又はは路程の測量風俗の異同方位の當
非其外の事にてたる事にて其實に當らざる事より其儘混じ置ぬ
堅は北際波村境石原より南は西須惠村境現海まで
九二十一丁程
横は東幸崎御関作境より西は白出村大川迄
九二十丁程

一村 小名

上中野

中野

黒 現
海 城 野

片山、田々、端々、辻、谷、下山、人家なし
関作、人家なし
人家なし、上矢、下余、上井

目出

且

一 山川形勢

但村外高山無之只小高き山野合壁山等に而御座矣且目出中有
帆川の流北大川の部に乙御座矣事
一 東者中野幸崎兩御関作より際波村境迄現海黒石中野上中野之四
ヶ村田島人家相連矣事
一 北、際波有帆之兩村之境御立山合壁山山野田島等に而相隣矣事
一 西、八有帆川より西須惠村境迄川歌海濱を境目出且之兩村田島人
家合壁山等相連矣事
一 中央、八山野合壁山田島森林等相交矣事
一村、白請土地相
但上中野中野黒石現海以上四ヶ村、儀是南海請平地にして西子
山林有之東南閑之日請宜村方子、陽地子御座矣且目出兩村の儀
も海辺休子、御座矣、共東南に山林を請朝日邊、西を岡き村方

に乙先は半陽の何梅に御座事
一田地土地粗材の大概深中土黒土又ハ河心カ土昌の儀者大概赤土

一當村には石一何無御座事
一儂言ニ石炭の出る土地は石を々ものといふ此邊石炭の出る由ハに也

一水掛水損早損
但村内河筋無之用水の儀者堤池又ハ天水田等に雨水の付々敷方早損勝子御座事尤余程洪水の節は少々水損早御座事

一肥下草
但村内山野至而煎敷其上先山勝の薄地は乙肥草不々意糠子餅等の買肥に乙作方仕事

一季候植付物時節
但一村ハ南海辺ニ付暖氣の方にて地形平地存小ハ風雷強白雨ふり兼雪は平年五六寸積位八九寸積りの儀者至而梅の儀に御座事

梅作物時節二月廿日頃紐纏を返し三月土用の初頃よりニ三度に苗代蒔入置美日より九日穀五十六日廿六日迄に乙入梅中植付申候

夏ハ烟物小豆大角豆ハ八十八夜前粟黍穉胡麻ハ小満四月中蕎麥ハ二月十日前後大根蕪ニ百二十日の後菜種ハ秋分八月々中の後苗床ハ蒔入置十一月頃迄に植付蒔蒔子南草等はハ梅中に植置申事

月土用後より十一月頃迄に植付蒔蒔子南草等はハ梅中に植置申事
一田畠數百四十七町六反七畝九歩
一高千七百拾五石八斗五升五合

御藏入田畠數百拾四町五反三畝九歩
一高千三百八拾七石九斗七合

田數八拾四町五反三畝九歩
一高千二百二十八石三斗五升九合

田數八拾四町五反三畝九歩
一高千二百二十八石三斗五升九合

田數八拾四町五反三畝九歩
一高千二百二十八石三斗五升九合

田數八拾四町五反三畝九歩
一高千二百二十八石三斗五升九合

田數八拾四町五反三畝九歩
一高千二百二十八石三斗五升九合

田ッ成
三ッ成
小ッ四步成
石貫

千貳百九石八斗九升六合
办 五石七斗
畠敷三振町寺畝廿七步
高百五振九石五斗四升八合
諸給願田畠敷三振町五反四畝
高三百六振七石九斗四升五合
田敷廿八寺町三反八畝六升四步
高貳百八石七斗五升七合
畠敷廿八寺町五反五畝六步
高四石六石四斗六升八合
田敷廿八寺町八反三畝六升五步
高百七石七斗七升七合
畠敷九町寺反八畝六步

高三石八斗四升八合
右宅藏主様御知行所
田敷四町九反六畝
高六石六斗八升七合
畠敷廿八石五反五畝六升七步
高八石四斗九升八合
右島居神七上門様御知行所
田敷廿八石五反九畝九步
高三石七斗七升五合
畠敷廿八石七畝五步
高八斗九升八合
右鑿鑿九町寺反八畝七步
一端鑿九町五反五畝六升七步
高百八石七斗七升四合
御藏入濱敷七町寺反六畝六升七步

高百五石九斗七升五合
濃教六石四斗七升六分
内高百三石三斗六升三合
濃教六石五斗五升
高六石六斗三升四合

石貫

石別三分成

濃教四石六斗三升六分
高百八石五斗八升六分
濃教六石五斗五升
高六石六斗三升四合

石貫

石別三分成

但文化十四石五斗三升三合
前書塩濃持塩不相成御徳方御徳地ニ被仰件現土地の儀
ハ御同作内田畠ニ相成御所貯米銀御徳方へ被召上御本
勘御帳の儀は行移の通塩濃ニ而被閣候ニ付御所貯五諸出
米銀失々御徳方より立戻被仰付尤右の内三反四畝斗
歩高九石五斗三升九合先年也藏主様御借地ニ被仰件四町

内作の内へ籠り居分有之付右へ當り濃方御所貯五諸
出米銀失彼御領分より取立御徳方へ上納仕矣事
濃教六石八斗三升六分
高六石五斗五升
濃教三畝六斗
高六斗

石貫

石別三分成

給願濃教六石四斗五升

高六石五斗九升九合

但文化十四石五斗三升三合
塩濃持塩不相成ニ付夫以來現土地の儀は田地に相成是矣
得共春定御一紙の儀は行移の通塩濃ニ而被閣矣事

一諸上納物
御藏入

並米五百六十六石三斗六升六分
銀三貫五百九石五斗四升八厘

島銀

銀老貫四百五十九分四厘九毛
 同三百五十九分四厘
 同八十八分七分
 同百三十九分七分六厘
 同百九十九分八厘
 大豆三石斗九升九勺六毛
 麻繩四束送房
 淡紙老枚步式味
 細引老本步式味
 牧牛皮 四枚
 但〇〇共予旧例以上細美也
 諸給願
 並米百石九斗八升三合七勺
 銀四百大石四斗八升八厘
 同斗百五升九勺九厘

御領
 山立銀
 山立銀
 土真銀
 瀨銀
 門役銀
 瀨銀

瀨島銀

同三升自三分九厘六毛
 同六分
 御藏入給願
 同大石三分

大工掃屋水紋銀
 瀨銀
 門紋銀

一 小貫
 米六石七斗四升六合三勺
 但文化四年御政五分
 同七石六斗六升五合
 但天保三年御政
 一 御米倉七ヶ所

御藏入
 中野御藏
 但四方練堀梁行三間格行大瀨葉草戸前之ヶ所
 田御藏
 但四方練堀梁行三間格行大瀨葉草戸前之ヶ所

日出御藏

但四方練堀梁行六間桁行四間半葉葺戸前々々所

中野社倉

但四方練堀梁行六間桁行三間瓦葺戸前々々所

諸給領

上中野御藏

但四方練堀梁行六間桁行三間瓦葺戸前々々所

黒石御藏

但四方練堀梁行六間半桁行三間半瓦葺戸前々々所

現海御藏

但四方練堀梁行六間半桁行三間葉葺戸前々々所

一同所御園穀有米 天保十三寅暮御藏詰の辻

御撫羽名目御園米百六俵

同所御園穀百六俵之俵

新入替張繩御園米四水四俵

同所御園穀七水之俵

凶年御生當御園米之六六俵

社倉穀米七水七俵六斗七升四合三勺七分

一之里塚

萩唐樋札場子少十四里

苅屋船場子少之里式水之町

一萩在海邊江里敷

當村南海邊部之御座矣萩府近十四里船水動場迄六里程御座矣

一御立山

御着請山

一平廻山 三町八反四畝

一小平野田山 六町

一畠山

一野瀧山 六文式畝

外之小平野田山五町西復惠村催合山、廿西復惠村、出し之反ヲ除

見徳山 打越山 藤ヶ谷山
 小野田山 屋ヶ場山 佛ヶ廻山
 高雄山 小日出山 柳ヶ谷山
 一寺社境内山 式ヶ所 所敷式町八反四畝 式水七歩

一 大河
 有帆川
 上中野蓮光寺山 五反五畝八歩
 黒石村松江八幡社山 式町六反九畝九歩

一 小川
 密川
 但上ハ石ヶ河堤下ヨリ流ル喜崎御閑作汐土手唐樋迄南流シテ
 海ニ入旁村办現海ノ東迄水入所程川橋流来ニ即
 但上ハ堀越九郎五郎西村ヨリ流水出目出川以迄五里半南流シ
 乙海ニ入流来ニ即川幅五尺為間船の往來川尻ヨリ有帆村火箱
 迄

一 橋
 是ヨリ下喜崎御閑作内ニ即付梅田川ト相唱美事
 土橋 式ヶ所
 石橋 式水三ヶ所

平田石橋 長き間三歩 橋四尺五寸
 岩鼻石橋 長き間四歩 橋三尺三寸
 疫神鼻石橋 長き間 橋三尺三寸
 橋尾石橋 長き間 橋三尺三寸
 宮川上石橋 長き間九歩 橋八尺五寸
 同所下石橋 長き間九歩 橋六尺五寸
 うとの石橋 長き間 橋三尺三寸
 塩屋元石橋 長き間 橋三尺三寸
 屋敷付石橋 長き間 橋三尺三寸
 永之石橋 長き間 橋三尺三寸
 馬子石橋 長き間 橋三尺三寸

浴尻石橋 長七間 幅五尺六寸
 川下石橋 長三間半 幅三尺六寸
 小目出薄尻石橋 長三間 幅三尺六寸
 小目出石橋 長六步 幅三尺六寸
 同所下土橋 長三間 幅三尺六寸
 口岩石橋 長三間 幅三尺六寸
 目出薄尻石橋 長八步 幅四尺
 八幡石橋 長三間半 幅四尺
 同所尻石橋 長九尺 幅四尺
 古釜石橋 長六步 幅三尺六寸
 たぶ原石橋 長三間半 幅四尺
 宮馬場尻土橋 長三間半 幅四尺
 現海後石橋 長三間半 幅四尺
 一井字 三ヶ所
 一堤 四丈八ヶ所
 一溝 百ヶ所

一樋 丈五ヶ所
 一坂 廣々御普請記録帳、有之矣、付茲、畧す
 一家 敷丈百丈六軒
 竈敷 丈百丈六軒
 本百姓 八丈八軒
 八丈三軒
 四軒
 冬軒
 亡土 百姓百丈八軒
 百三丈九軒
 五軒
 四軒
 一口 敷千四丈四人
 農人 大工 桶工
 農人 大工 桶工

男五百三十三人

礼屋三人

昨頭三人

女五百五十一人

結社屋六人

結野頭八人

以上村嫁人八人

僧六人

社人七人

地卜醫三人

職人礼馬喰札

大工掃工六人

但職人礼の儀

分宛年々上総仕云事

馬喰札當御軍判の儀者已前牛馬賣買の付馬御多難波申掛矣

儀有御百姓中不便理差伺の欲御座矣之付其節御断申出馬喰札

一 在宅御諸士並陪臣
御諸士三軒
御取揚御厩方江八郡配寄米の好を以年々上総被仰付来之付馬
即礼庶御座矣事

總頭九郎在工門様
佐野十藏様
佐世彦七様

一 雜戸
先藏主様御家頼
廣澤幾馬殿

〇〇家数才九軒

人数 男七人 女八人

一 牛馬数 百六十八足

一 渡船隻艘 馬九十八足

目出川

但長分大五尺横造りの分造り土取繕共ニ地下段し事

一風俗

中野

但此村の儀者農事専一出精仕候得共鳥糞其上薄地田地麥蒔
與數麥戸以口行足下申山野至而糞取取肥草取得不相成糠干麩
等買入作方仕美小高ひ等の心懸仕美者一回糞御座美農際ニハ
下品石炭少々宛堀出賣耕一御渡世の即ニ仕美もの御座美
尤村中別御勤業相勤升来ニ御百姓中且ニ相續仕美事

上中野

黒石

現海

白目

白目

但此五ヶ村の儀ハ農事専ニ仕美得共麥作出來不宣取實糞敷戸
口ニ行足不申山野糞敷其上薄地ニ而肥草不女意糠干麩等の買
肥ニ而作方仕美小高ひ等を心懸美もの糞出座農際には下品の
22

石炭少々宛堀出賣耕ニ而渡世ニ助ニ仕美もの出座美
右前條々村々少々宛風俗異同出座美得共年中行事等の事は差而
相かわりたる儀也此庄美即年頭元三ハ寺社参詣地下段座親類
因の内等江年始の祝詞申述進々親類或は親分杯江は祝ひ餅百疋
等持参往來をなし頭立美ものハ有公の煮豆敷く子なかに酒酌
合遠方より来れる 黄な粉餅出す此庄美また正月の内には初
寄合と鳴村別餅頭元へお會社人を招き於鎮守神樂を奏し其後村
中のナリ方申談仕美事

五節句には少々 勸業仕のオニ出座美事

四植の儀ハ其節に至美得ハ人毎に子に臥し寅に起精を出し其當
仕美植様ハいひ植とて互に午間を満合或は獨植とて其一家内ニ
而植もあり又大作のものハは雇人仕も此庄美林中植終るを代りて
と号し氏神参詣村別於鎮守神奈を奏し膝癒しとて僕婢に至迄一
日宛休息仕美
六月晦を名越と唱へ軒別牛馬を海河杯へ亭行洗ひ来る
七月盆には且邦寺参詣至り銘々先祖の墓所詣又親類所縁のもの

来任し二位牌へお礼成候し十四日十五日両日ハ僕婢に至る迄休息
仕舞内少壯の男廿打寄り盆踊りとて大鼓成打手拍子を揃へ踊り来
りし所成度成改革ニ付盆踊以居留止め申成尚近年とて盆節季とて
少々の取引を仕舞事

祭の儀ハ春夏のみハ萬成水田村ハ九月十三日其餘は同十六日
氏神祭礼ハ作家々に職味たて銘々社考仕共其後村別鎮守の小祭と
号し有念ハ魚野菜ニ御親類朋友来任して濁酒杯酌合流例も出
座矣

元服の儀ハ一統お輪ニ御相濟せ家内打寄眞の心祝ひ仕成此
座矣

婚礼の儀ハ嫁取算取共二仲人親類と名連越し牛軽き魚野菜ニ御料
理を汁成菜有式三種も調盃成以たし来矣成成改革ニ付を汁一
菜有式種ニ申談仕矣
家建の節ハ親類近隣少濁者又ハ白米を式牛線竹の類少々宛持寄
手傳仕来り矣
幕成の儀ハ親類并講中相集り米を式牛線竹等持参師坊を招野邊送

り大概火葬ニ仕来矣尤此度成改革ニ付親類の外は米を牛宛ニ申談
仕矣

年忌の節ハ親類至亡者江所縁有との相招師坊の相伴仕也輕き齊
差出申矣尤此度成改革ニ付料理を汁成菜申談仕矣又困窮のものハ
上ガ法事とて牛ニ御相當し儀も成座矣尤家内近親類のもの計参詣
輕き駿物備り進ニ成座矣

扱又村中大概奠宗ニ御岡山忌御取越とて年毎八月頃より家々に師
坊を招相當申矣
手即ちひ子の儀ハ年廻ニハ餅を重ね百疋ニ五節句ニハ白米成牛宛
頭立矣かの時春分有一折宛遣す由の由成成矣歳暮ニハ暮の祝儀と
し身分相應師家へ相勤来り矣

下男女の出代り師走十三日ハ限り矣此外少月廿といへば田植の
頃五十日秋廿と申ハ秋の限百日を期とし成座入申矣扱又一日座の
儀ハ日別儀錢八十文ニ御成矣
身成には春分ニ定會と号し五七日宛蓋會七日宛二季彼岸七日宛宗
々岡山忌會七日宛法會並説法相勤志若男女参詣仕来り矣

一産業

木綿織出二千五百反程
 此徳銀六ノ式百五反程
 石炭七万九千振程
 " 五ノ式百目程
 石炭塩込
 " 五ノ百目程
 薪切賣
 " 四ノ程
 竹切賣
 " 五ノ百目程
 筵縄 已上
 " 七ノ百目程
 大工桶工
 " 四ノ八百目程
 紺屋

" 六ノ六百目程
 灯ノ人座
 " 式百目程
 瓦屋
 " 六百目程
 醬油屋
 " 式百目程
 油屋
 " 五百目程
 魚塩其外何賣
 " 五ノ八百六反目程
 蠣灰焼
 " 三百目程
 糶屋
 " 七ノ百五反目程
 地下鉄田

藥草の部
 莫竹 淡竹 苦竹の類 桐 杉 松 柏 山 栂 子 艾 葉 菰 附 子 麩 子 水 鹿 天
 得 共 取 得 渡 世 の 助 け 仕 事 の 一 句 無 水 陸 更 事
 禽獸の部
 鵲 雁 鴉 雉 子 鷹 五 位 白 鷺 大 鷲 鳥 狐 狸 犬
 魚の部
 鱈 鰻 鮒 鮓 の 類 獵 仕 者 一 句 無 水 陸 更 事
 以上
 古書寫



黒石村農家三在二門竹村御判物

父勝卿所帯長門國阿蘇郡賀年御内田松石足任去永正十六年八月
 廿二日下知同郡小川御内松石足享録四年閏五月三日龍福身殿
 裁許并天文元年三月十三日讓狀等。皆致多誇大炊。隆道相續不
 可有相違。此が伴。

天文廿一年八月三日

一 神祠

一 松江八幡宮 壁田村有 社人白石和泉介抱
 一 御殿 入を大横を丈五尺八寸
 一 濱縁 入を四尺寸横を丈五尺八寸
 一 釣屋 入を丈五尺横九尺五寸五歩
 一 拝殿 入を丈五尺九寸横丈六寸五歩
 一 向拝 口七尺八寸横九尺五寸五歩
 一 神輿庫 入九尺横丈九寸五歩
 右 上 屋 根 八 尺 五 寸 横 八 尺 屋 根 葺 葺 の 事
 仲 哀 天 皇 侍 言 大 明 神
 一 祭 神 五 座 應 神 天 皇 武 内 宿 禰
 神 切 皇 后
 一 年 中 祭 式
 一 元 日 子 三 十 日 迄 社 中 宿 直 の 事

但鏡餅神酒等すべし供物相備氏子中軍越の社參鏡餅相備矣
昔しきりの風俗に由る矣

一正月廿一日同十一日同十五日同廿五日共七神勅
一二月卯一日神勅
一五節供調進の事
一毎月朔日十五日神樂
但社中皆參

一春神樂
一作彼神樂

但作伴相濟村々あり神酒散米を相備五穀成就し神樂御座矣

一惣神樂
但氏子中地下役人中參詣修甫等の申合仕其上

風 昆虫 人間牛馬

右の三座神闌を引し取分吉鳥を撰相調矣事

湯立 百度參 百度杖 角力 三日籠 神樂 神幸

十七度參 通夜

右神闌を引し取分吉鳥を撰相調矣事

一夏分三昆虫除としし田頭へ神幸御座矣

一夏越枝執行

一九月十三日當屋を足社中地下役人共之集會仕神役割等申合神役

帳相調申矣其調様古き分在之記

元禄六年申祭礼水道吳附並

一御景高持式人 一由獅子持式人 一由餅持式人 一由餅持式人

一由長刀持式人 一由丁字持式人 一由知體持式人 一由櫛持式人

一由多分持式人 一由子持式人 一由箴持式人 一由櫛持式人

一由大鞍持式人 一由鞍籠持式人 一由釣持式人 一由興之辨式人

以上八式人

式人 但中興式社 喜崎

人 但同 式社 喜石

式五式九人 式一 式馬を走

右者社御祭礼神役黒石村に相當り其例年の通隨念を入相
調可申上以上

元録六年
九月十日

神役當番村
役人中

右前異之

右の通御神役念を入相調江させ可申上以上

社人江當る名
地下役人江當る名
地下役人中
右前略之

右の通當屋之御神役江相當小材の役人より毎年書附差出申上元録
中より以来の分神役帳を舟中座美元録以前に分ハ紛失の由神役
帳紙書附内座小

一 祭礼從九月十五日至同十六日

但祭事式の儀ハ九月朔日之社并社家中ノ繩を張行相立止是
潔者の始ニ内座美同十三日神ノ四手を伴て當屋の庭中ニ差立
置拔執行同十五日夜社人皆参して拔執行仕祠官内幣を搦て祝
34

詞を奏し是ニ從ひ神官神樂を奏申上氏子録々初穂一夜酒等
を相備申上同十六日早朝供上五膳相備申上戸関神勤神役の
ハ當屋へ参り清めを請神酒度載りしめ是も清めを請
小右清神酒等の諸世託宣座のハ勤之掛神役ハ力の行到仕社
参共办上御申上小兒騎馬ハ切鎧を掛申上是ハ神事奉行
の儀年リ夫より未ハ切鎧に神樂ニ懸内旅行有之社中五ニ
上御神役のハ神樂ニ隨ハ内使尤神官ハ金幣持参内旅行
而神勤相寄還御次ハ流籠馬の座小

一 御煤をさいの神事 十一月十日

一 縁記写

長列厚旅郡村江八情
大八橋大神者根神氏天皇ノ成としめす御門ニ即
應神天皇の由事也 神最天皇方西の御子ハ母ハ神功皇后ノ
皇右擊玉ハ時未夕胎中ニ長玉ハ御名成粒中天皇と申す既に三
韓を平うけて筑紫に歸り然ハ御産の紐を解き終ハ其所を宇津

と申今宇治の都は天和の輕嶋の宮にましましと天ヶ下三
しめす此増三韓より貢もの奉りかく小まじし後八ツの旗に葉
りて顯小紘は我は十六代の御門座神天皇也筑紫にて異敵を妨
百王の末子も守うんと説しと宇佐の宮に鎮りまふ御代々々の
天皇是を敬ひ國郡所々に靈廟揃き功德最高し誰か神名を仰さ
ん誰かめはたのつゆを羨らさらんや扱
仲哀天皇の心宇に然襲不從皇命筑紫に伺ひて怒を打給ふ於是
皇位に神の告あり何を然襲は小敵也伊勢並の生才玉いし國存小
は攻すとも從ふべし從是西に怒あり財の國なり攻むへしとあり
しを仲哀天皇神の教へせうけかひ給はず事不熟しと程日の行宮
にてかく小紘ひうか長門にをさめ奉ら小を穴門の豊浦の
宮と申忽皇后神の崇りあるを志ら給ひ故罪をして國土を清めみ
つかり齊宮に入らせ神主と成て神祇を祭給ふ夫より神の教へに
まかせ新羅を討へきまじ百官百司國々所々勅を傳へ給ふ於是
穴門の船木山に御桶を伏せ軍ヲ船をつくらせ給ひ有帆には帆を
はかせ梶浦に御船ををつくらせ其外官軍陣を布せ給ふ所城戸か

リや杯とハ小地名あり此邊すべし由緒の所多かりき中にも厚東
の松江の浦は長門の國南をうくる無双の湊なり茲に鳥賊津臣官
軍を招き紘少軍船此浦にこくたり既以發とを傳して彌神終
を祭り異賊降伏平政の由新津に所々に執行と急りなかりき武舟
宿務は舟がから琴をひき神樂を奏せしむ忽白髮の老翁觀小彼の
宿務の前にも官軍に從ふと水力をなし奉らんためにもいふこと
ひ豆哉此翁も官軍に從ふと水力をなし奉らんためにもいふこと
、申き豊浦の山景を思ひ食小給に此處に水帯を残して西顧にを
下下らせ給ふ其後門司の國に着潮悉干上と水船通らず彼老翁只
獨して水を推おしけり皇位頼母しく思食小けり其後おすいの
濱に着給ひ謀畧を伺ふ先翁の同族磯童部と云者あり彼をめ
しと海宮江遣ひ乾満の二珠を傳しは、豊秋を攻從へんすはいと
易き出多也とありけり其時皇位頼母の如く庭火を焚き神
樂を奏せしむ磯童部船に乗て浮い来る皇位頼母の乾満の珠の事を
命し給へば磯童部出宣旨をいかに不肯ると次の日彼の二珠を皇
位の御前に敬奉る其後皇位頼母をおこしかりに男の姿となりて

出立既に出ますにはおさんで凡の神は風を起し海の神は波をあけ
て天神地祇悉く舟船を守り新羅の國に押わたり結ぶ彼國の軍兵
とも雲霞の如く起り皇佐の御門を討取奉らんとす其時皇佐の御
船には彼老翁乾珠を海へ入玉へは大海幸く干上りて陸地の心と
く成りければ彼國の軍兵とも味方の勝軍なりと皇佐を討奉らん
と潮干に就て進か、りし時満玉を投玉へハ忽潮蓬萊の心と起
り来る大海もとの如くに満しかば不獲溺小死けり三韓の大王こ
ルを免て國我南東神の國あり日の本といふ聖の國あり天皇とい
ふかならず其國の神軍ならん豈可妨哉とを分あのお、おて降参し
けり三韓の大王誓て云哉等日本の狗と成て可奉守獲干御國と故
に皇佐大磐石の上三韓の大王着日本の大住りと御弓之上瑠璃に
書附然も御守々從へて筑紫に凱陣し玉小實に日本の御威光異
國までも輝せ然も事甲の甲々忠心多かるべし干茲長門の國厚旅
郡壁田縣に鎮座し然も奉仰 松江八幡宮とて往在皇佐三韓江越
き然も時奉供の官軍神祇を祭り幣を致して去玉ふ其跡を里の人
々こ心を敬む祠を建て祀之其所岡の原なり冷守嶺其後厚東氏武

仁役祠を再建して寶龜年中從宇佐奉勸請後柵井恒石ハ戰等の寶
物を收御崇敬あり其後世之教逆をこり然に厚東氏之神田之城既
に社荒傾に及び於是旁御の心所司代三戸氏こ心を壁田山に欲運
と祠職正実彼宮之御園を奉て神慮をうかひに即壁田山に近す
事をゆりし然も因茲寛正大乙酉年壁田山を岡々新に社を建彼岡
の原より奉遷之中央殿 應神天皇在殿神功皇佐右殿仲哀天
皇祭礼九月十五日同十六日いたる復高八ヶ村の忽鎮守に此宮
の布せ然も壁田山ハ松杉茂りて一粒高く川ハ山の腰を巡りて流
る、堤を穿り馬場ハ一町計張出て海に貫く茲にか、り松といふ大
木あり昔皇佐新羅を討玉ふ時奉使の兵船のか、りし跡の名存り
すべし此船田を松江の津といふ實にかきりある日き跡に靈景
の勝たす所なり潮干れば教百町瀆を顯して金砂を布く滿れば岸
を打破鼓の心と響き松ハ琴のしらべをなしとあ、のづから神樂
を奏す地勢潔く誠に神徳のすまじめとまろこひ然も處なり故に
靈廟か、りやき人々の敬小にま、つて神威彌増し益々奉を降し然も
祈ると心悉験にあらすといふ事也し恐お慎やと尊敬すべし

當社の縁起をのりて欲顯其神徳を難然從寛正至寶龜年曆甚た
遠し况や及神功皇極の時代は其詳考へら小寺只即家、私記す
所又は右老の語をくはへて記之可
一 釣鐘銘文寫

當願江千億衆生脫三々世界竊以私江外百剎國智儒五已名此靈
殿崇觀雖有愚擲王未織席餘茲戸田此銘居白石作右工門太輔筑
連之相江氏子八箇村點首不我大小施主鑄之者也
空内受氣圓吐声心為表相靈所發生巽厄銷鏡劍羅謹握鎗吐杖分
候夜大鳴

奉加 氏子中名書教多錯之
千時慶安貳巳丑南呂廿七日 於長門府鑄之
大工 長列府中 本金屋 藤原朝臣景繁系
一 慶長十五庚戌三月廿五日 施主敬白 河野雪信
一 隨神產産書附

副當快深

文明六甲年

佛師上綱

一 石ノ華表 一 基

右往右より有來小所破損之任室永四年氏子申より建替申小高
ミ大三尺徑九尺ノ事

一 石ノ華表 一 基

右同斷元天五年氏子申建替申小高
ミ尺五寸ノ事

一 大般若六百卷

一 石燈籠

一 御 幕

一 佛 龕

一 佛 像

一 佛 像

一 佛 像

一 佛 像

一 佛 像

一 佛 像

一 鏡 右 同 斷

一 鞆 右 慶長十五年子九月

一 神鏡 右 宝曆四年九月

一 神鏡 右 安永元年

一 當社再建立の儀は當御の由所司代三戸有次由建立の由其後乃治

一 本遠江様由裏書もの由此所此版寛保寶曆の付出前より此座下

一 判被仰付来り事 初代々吉田殿裁許状に書入行事相傳於時位階

一 昇進仕事

を人

但祭日之神役の請世詔仕官座と唱来り往在り其家流し此座下

一 社坊止より年曆不分旁時並此座下

一 社殿附立

一 萬石石入斗田并九合

一 右黒石村水菟入向一紙除

一 右斗九并

一 右七藏主様此知竹所氣川村由一紙除

一 右鳥居神在工門様此知竹所黒石由一紙除

以上

外

氏子中軒別号、米三合宛賣立尤事時清事、ハ有調進仕事

右之通御荒入結願共之社殿社付置即此運長久五穀成就此祈禱無怠

執行仕小拵往右ハ神田所々ニ社付置社領守護の神戶此座下由正史

ニ相見小駄之當社の日所前村の内守座と申所ハ傍ハ八橋迫野田鐘

撞面村ハ小所あり又壁田村の内にも神田苗田などハ此地名あり

づれも昔神田之水産小由古危中傳小賢玉一之徳源元の社江奉供し
 帰子由縁起と高座小元藤五年材木三本成社山一印採用被差免し由
 理り状と山田五左衛門様母孫三左衛門様由裏小産小旁社奉祀十月
 十六日より十七日執行仕仕但奉前後には必々白き鳥一番境办て未
 了権現つかじしぬの由佐告と由理小
 一松ッ江八幡宮
 自出村有之社人
 白石集人抱

御殿入四尺五寸四尺何様由三尺四寸五尺三寸何様殿入を大岡之て大
 大尺何様由五尺四寸八尺釣屋八尺四方

祭神應神天皇 祭日 九月十七日あり十八日
 但祭年式の儀ハ大宮司地下役人至神紋中社奉神輿馬場先帝旅

所ハ御幸有之清拔大役執行神河原負載仕夫より還幸相成小事
 尚社内鎮座の儀ハ和銅二年と古翁申傳棟札應仁三年と由理小事
 鐘樓
 但八尺四方上屋根茅葺の事

釣鐘 一口 差渡を尺四寸

真宗金龍山 蓮瓦葺 上中野村と有之

一本堂 棟札無之 但桁行九間梁行八間四歩五朱屋椽本瓦葺の事元享永五年再建

此免の事

一庫裏 但桁行九間半梁行七間半屋椽瓦葺の事天保三年再建の事

一釣屋 但桁行五間梁行二間半

一茶所 但桁行二間半梁行二間半

一鐘樓 但七丈四方の事

一本門 但桁行二間半梁行二間屋椽瓦葺の事

一小門

但老間宛本門の殿に有之屋椽同斷

一藏

但新行五間半梁行二間半屋椽同斷

一長屋

但新行九間半梁行二間半屋椽同斷

一本尊阿林陀如來

申來書覽

一寺記に曰先祖は大織冠鎌足公の嫡男淡海公の末葉伊東主水正藤原の順正一家福業極道事足利六代の特筆深の義教公の命に依而順正養子と成り家名者改而伊東采女正順光と申矣折梅喜子に別れ現世の無常を感じ頻りに菩提の心難止依之義教公へ暇を願ひ本願寺乃八世蓮如上人の出家子と成り法名蓮光と改め其節大字名號を嶋上人より授與相成只今身替りの名号と称し其後寶徳年中の頃師命を蒙り為弘法西國へ罷下り其砌深き由緒有之大田家を頼山口へ住弘法の志而復惠御黒石異説に復惠の番所と有之采田所迄罷下り不

白に弘法いたし只今の所へ草創の事

寛永八年御奉書の内容

今度其方御儀御靈前出常勤の由事大儀の至りに被思召矣然處就法用當分在寺の暇被願出矣通り出窺申上は處即被急在中許容矣條得其旨勝牛次弟可被遣毛帰坊矣尚出召の節ハ速に可被出旨仰之而由座矣未十月九日 実戸三在衛門判

續書 蓮光寺

清光院極御一周忌の御作善今日十六日より廿日迄被仰付矣所然八十日日の朝五ツ時被着被申上は椽に夜を續き可被罷越旨矣自然其身於煩二者御經誦被申上傳急名代可被差出外お獲者一廉從公儀一も仰出小節後日為念如斯恐々謹言

六月十日

伊藤元友

実戸三在衛門

右の分ニ被仰出外付而伊藤元友実戸三在衛門より被申上は成爲不可有由緩加實書申上は二

実戸民部ヲ輔

同 但馬守
福原相模守

右御奉書は當寺大世の住持頼心儀
清光院様在世中山口宮野御殿へ毎々被召出由法紙被周召上小依之
寛永八未六月廿日被遊御遊去小節領出儀本寺端坊へ被相添由葬儀の
由勤仕燒香主被仰付引續き由百々日の同着由靈前常勤被仰付事
一拙身儀者尺由御侍代より只今の所へ由建立二即由座小其後大世の
任身頼心代清光院様在世中山口宮野御殿へ毎々被召出由法紙被周
召上依之寛永八未清光院様被遊由遊去由葬式の御由由由緒を以由親
經由燒香由勿論由中陰より引續き由靈前常勤被仰付難有由法勤仕小
其御由百々日相濟其後法用一付當分歸寺小殿の頼身社由奉行所へ申
出小所其節由奉書に今度由方由儀由靈前常勤の由事大儀の至に被思
召矣然處就法用旁分在由殿被親出小通々由窺中上小所即被遣由許容
小廉得其与勝手次芽先可被遣歸坊小通由召の節は速に可被罷出旨被

仰渡奉得其由小且歸寺仕小而も奉蒙由學思の儀に付於自坊法法
崇敬仕由自思の節は讀經仕由思澤奉報来小改申儀今以由急慢相勤未
小猶又清光院様由一因是帝法事六月十六日より由日追出執行相成小
節身社奉行所へ直々御沙汰を以被召出小節由奉書頂戴被仰付難有至
今所持仕小由の由由緒を以前々より由作善の度々由御親經仕由燒香被召
出猶由正統様方由作善の節者度々由御親經仕由燒香被仰付難有仕存
小且又先年治親公御下り被遊小節は拙身儀由小休由所に由被仰付難
有奉送其節小且例年京門宛被仰付の節は定法由用場に被仰付天知年
中迄者由代官直達之事と由日記に相見申小旁の趣被聞召屈由深き由
由緒由座小付何卒以度由作善の節由納經由御各典奉納由燒香の儀前
断に被對急由由緒被差免被下小様奉親小以被寺社由奉行所へ被仰出
宜様被成由沙汰可被下小奉頼小以上

文政十三
寅五月
厚狭郡中野村
蓮光寺
清光寺

右前書の通申出小付致願書差由申小尤彼寺儀は原由由緒も有之旁

被為對格別の由詮儀を以難出の通り被遣り許容被下様於拙院願存小
故取置由抄次可被下以上

院代明系寺代印

清免寺

皆款院印

口羽主水殿

稻社九郎兵衛殿

帝免寺は縁紙の寫

本書中出の縁被遣り由詮儀は處重と由緒も年之儀に付格別の由詮儀
二而由法事問合の節は燒香被仰付止事

高野申上止事

拙身儀者被對由緒清免院様於山口被遊由遊去小節本寺於端坊差悉
此蘇送由供由燒香被仰付初度由作善の節は當役中より由是紙を以由
燒香被由小様由抄次被仰付今以由連名由是紙所持仕難有仕居奉存
小其後由代々様由作善の節者由香典納經是上由諷經被仰付由由由
座小所當身久々無任相續由香典納經是上由儀は中絶仕於拙僧力下

恐氣毒千萬奉存小然小共御諷經の儀有今以由諷經被仰付由
一由目附由代官其外由役人方由出浮の節は當將由止宿等被仰付教十
日由滯留の儀有之奉遂其節小且亦由鷹方由役人其外由側方由出浮の
節も度々由止宿相成聊も無滯出用何奉遂其節小
一享保年中餘閑官昇進仕由由緒被是申上年始由見合被差免難有仕合
奉存小

一去年八月英雲院様當寺へ由下り被遊由盡休被仰付由通リ怒り由
見合被仰付猶門前迄由迎由見送等被仰付別而難有仕合と奉存小由被
對由由緒英雲院様由一因忌由三週忌由七週忌の節是右の由願申上由
香典是上由燒香被仰付難有仕合奉存小其度英雲院様由七週忌御法
事の節より由香典納經の向差上由是向正統様由作善の節是式由燒
香被差免被下様偏に奉願小前断由申上其様由兼而年始由目見合被仰
付由正統様由作善の節由諷經を由被仰付由向旁之趣被問召上願の
通被遂由許容小様奉願小此取手社由奉行所へ被仰由宣被成由抄次可
被下由奉願以上

文化式 廿九月

登候御總惠拜真宗

右前書に通水由緒の寺極猶清光院様小靈前帝勤仕小被為對旁松別の
出了箇を以願の通り定式の出徳番被是免下小様本抽寺申款存小此
紋宜中沙汰可被下小以上

同日

清光寺

廣岡院印

実産主馬殿
口羽馬之助殿

御書下と寫

右兼而由目見をも被仰付水調經に申罷出未小出燒肴の儀ハ英雲院様
水由緒も有之御法事の度之由香典奉納申燒肴被仰付小此度出松七廻
忌節法事の節より已來未正統様申作善の度之由香典差上申燒肴の儀
願出小由目見をも被仰付水調經をも罷出未小儀之件願の通り被差
免小事
一清光院様より拜禮の絹
一寺号免書

一軸包

大記

清光寺
蓮光寺

一當寺縁記

一喚 隆

一佛舎判

身替りの名号縁記

一丹
一丸
一三粒
一妙

抑此名号の由來は人皇百三代後花園院の御宇寶徳元年の頃上人蓮光
の御心付は西國の由來は泉法不行豆予に代りて弘法おれと師命にま
て住馴れし都を立出国防の山に大内家にゆかりありは彼所は下り湯
田の辺に私法し夫小より當所に終り一何專修を教へけるは或は信
じ或は疑ひ是近他方往來の法を同かざる故邪法まむす心得諸山の
僧侶大内の開断所へ断へけ小は即夫に命しを罷出と事宛小は蓮光是
小本じ弘法せし宗法の破滅せん事モ歎き悲むと云へとも詮方なく彼
の上人より賜りし名号他人へ渡さしと傍の申へ隠し今や死則をま
左小けり不時康正二年丙子三月七日横洲の邊へ引出し遂に断罪を行
小けり即夫彼の葦室に行見小は蓮光無事にし念佛の声せり不審な
りと候々穿鑿す小は邪法にあらずと証明は小は死罪の免許を蒙

大記

但同代 同前

一緇裝束官職免許

但九世順覺寬文七年十一月本親寺寂如上人より免許

一親覺聖人緣起

但同代 同前

一本間取縁官職免許

但十一世順康代享保三七月九日本親寺十四代寂如上人免許

一余羽官職免許

但六世順康代享保六九月九日本親寺十四代寂如上人免許

一寂如上人画像

但字置仕小

一湛如上人画像

一當寺本寺寂瑞坊に面中座小

一當寺末寺

年來即慶暇村
同 齋中山村

法輪寺
淨月寺

同 郡 宇 部 村
同 郡 棚 井 村

信行寺
觀行寺

一釣鐘

但九世順覺代延寶五三月一日本親寺免許の上調銘文に有之

銘曰

蓮花淨杜

八音聲一

脱其縲械

輝陰警蹕

秋月得句

晚霜回夢

惟功惟得

真諦及俗

親鸞聖人御道筆名号

蓮如上人御道筆名号

紐身替の紅字是也

一御道筆名号

寶鐘斯陳

九乳万鈞

空彼刺輪

義城送寶

飲喜津々

行信抄々

煎等煎佈

兆載千春

一福

一福

一福

- 一 帝因筆 聖教切 一幅
- 一 實如上人 帝因筆 又考子 一幅
- 一 帝因筆 聖教切 一幅
- 一 證如上人 帝因筆 名号 一幅
- 一 御因筆 帝因筆 一幅
- 一 良如上人 帝因筆 歌横物 一幅
- 一 但松口 藤人家の画 賛 一幅
- 一 紫のいろ 成のこし 二差の花さき 是はあふし の歌め なるらん 一幅
- 一 寂如上人 帝筆 歌横物 一幅
- 一 白あふへ 二差のこすむ へ 支那かほ 此世は よしやと ともかく 乙母 一幅
- 一 光明里 右帝筆 山經切 一枚
- 一 進衛 関白色紙 一枚
- 一 念日 筒笥 禮はや人のこし 是津ら 舞臺と 志り 勢は 依め たらまし させ 一枚
- 一 庭田 中納言 色紙 一枚 一枚
- 一 夏と秋と 行か 病空の ありし ちば かせへ ち、しきの 勢や 吹らん 一枚
- 一 中山 大納言 忠手 御短冊 一枚

心

- 許の 日と 七志 力川 野辺の ひめ ころい いか 乙や 午世の 末江 を 米 氏 万し
- 一 坊城中 納言 俊親 御短冊 一枚
 - 一 水の 面子 あり 吹み たる 春風 や いけの こ 本わ 成 今 日は とく 茶 一枚
 - 一 高辻 大納言 胤長 御短冊 一枚
 - 一 君か 代付 つきし と おも 心 神風 や 三雲河の 在 米ん か き 里 ば 一枚
 - 一 北國 翁 一 蝶の 画 一枚
 - 一 但人物 一枚
 - 一 飛鳥井 大納言 帝筆 一枚
 - 一 但鶏に 尾花の 賛 一枚
 - 一 う 博良 なく 戸の 入 江 水 漢 風 子 尾花 印 と よる 籠の 夕暮 一枚
 - 一 東山 院 帝 衣 錦 切 一枚
 - 一 右法 眼 筆 一枚
 - 一 但山水の 画 一枚
 - 一 高氏 將軍 帝筆 一枚
 - 一 但山水 人物の 画 一枚

差引

米五百三石八斗四升五合八勺九分
雜穀百九石六斗
一銀七石六貫六百石
但諸產物賣掛高并產業德銀二分

四石三百四石七分九厘九毫
六石三分
三石六分
四石七分六分
五貫四百五石
三石五百四石
三石六分
四石六分

不過不足

銀子方上納過
職人水役錢
油屋上納油代
農具仕次
牛馬負銀
着料綿代
漆代紺屋掛
塩代
年中日用諸雜費

了九石八貫八百石六分九厘五毫
尾引九石六分九厘五毫

不足

- 一市町
- 一溫泉
- 一犬山
- 一狼烟場山
- 一沼
- 一市
- 一本往還道
- 一穿屋
- 一市船倉
- 一高札場
- 一市番所遠見番所
- 一市代官所
- 一市本陣以茶屋

海
鳴
湊
植
廻
門
親
所
陵
了
右
當
村
之
者
煎
水
座
小
事

354
22

昭和八年十一月二十一日印刷納本
昭和八年十一月一日發行

非賣品

編輯兼發行人
印刷人

山口縣厚狹郡小野田市七二四番地
伊十藤作 一

發行印刷所

山口縣厚狹郡小野田市
小野田町五小野田図書館

終

